

---

# CHALLENGED ちゃれっ子通信

発行：2006年2月20日

## 特別号

---

### つながれ！ひろがれ！ちゃれっ子の輪

- ちゃれっ子通信特別号発行にあたって

『障害当事者主体』を掲げる、当法人では、多くの障害をもった方と交流を通して、生の声を聴いてきた。そこで、お互いに学んだことを、文章化して、チャレンジドの仲間にも是非伝えていきたいと思い、「ちゃれっ子通信特別号」を発行することとなりました。

まず、はじめに、田中嘉之さん（日本福祉大学非常勤講師）に、日本福祉大学卒業生として、また、障害当事者でもあり、教育者・研究者の立場から、美浜での生活のことを複眼的な視点で語って頂きました。次に、ドー・トゥイ・ハー氏（ベトナム出身）のホームステイと日本の文化を感じようツアーに参加したときの体験記より、グローバルな視点で、交流録を記してみた。最後に、宮崎健氏（高知出身）田舎のC I L（自立生活センター）体験記として、今後、C I Lの職員として、自らの夢と地域福祉の充実をも視野に入れたインタビュー録を掲載させて頂きました。

このようにして、国内外問わず、多くの方が、関わっている、チャレンジドです。みなさんも是非、彼らと関わってみてください。きっと、世界がぐーんと広がりますよ。

---

### も く じ

1 P ちゃれっ子通信特別号発行にあたって

2 P スペシャルインタビュー：この人に聞く

田中嘉之氏

5 P ダスキン・アジア障害者リーダー・ホームステイレポート

ドー・トゥイ・ハー氏

7 P 田舎のC I L（自立生活センター）体験記

宮崎健氏

## スペシャル インタビュー

田中嘉之氏

この  
人に  
聞く



### Profile

1962年兵庫県神戸市出身。日本福祉大学卒業、大学院修士課程を経て、日本福祉大学非常勤講師として、13年間在職。勤務美浜町在住歴22年。脳性まひの障害で、車イスを使って生活中。

今回の「スペシャル・インタビュー」では、これまで、日本福祉大学卒業生として、また障害当事者でもある立場から、熱い思いで教育に携わってこられた、田中嘉之先生を訪問しました。美浜・日本福祉大学と共に歩んでこられた、この22年間の歩みを語っていただきます。今年度で、教師としての仕事はひとまず辞められるそうですが、「社会福祉の研究は、生涯続ける」という田中先生の素顔とは、

## ここに、たどりつくまでは。

- 田中先生のライフヒストリーを教えてください。

早産による未熟児で生まれ、保育器で育ちました。命もどうなるかわからない状態でしたが、元気のよい子で、鼻から入れているチューブをよく抜いていたそうです。すると、酸素不足で、体中が紫色になるんですが、その繰り返しのもとで、脳性まひになりました。小学校は、6年生まで肢体不自由児の養護学校で学びました。6年の2学期から、父の仕事の都合で大阪に転居し、一般の小学校に4ヶ月通い、その後中学、高校へと進みました。その間、足の手術のため、肢体不自由児の施設で、延べ3年間暮らしたので、同級生より3年遅れて高校を卒業しました。そして1984年、22歳で、日本福祉大学へ入学。美浜で寮生活を送りました。その後、大学院へ進み、修士2年ではあきらまず、特別研究生として、さらに2年間、研究を続けました。就職も考えていましたが、すぐに見つからず、大阪に戻っていたところ、ある先生から「暇してるんだったら、母校の教育を手伝ってくれないか?」と、声をかけてもらい、非常勤講師として、仕事をするようになったのです。それから13年間、教員として再び日福で歩んできました。学生としての8年間も含めて、人生の約半分を美浜で過ごしていることになりました。



## 人間生活学へのアプローチ それは、教育・福祉を学ぶことから。

- 日本福祉大学に入りたいと思ったきっかけは？

私ははじめ、人間に関わる勉強なら何でもよいなと思っていました。きっかけは、養護学校小学部5~6年の担任の先生が、日本福祉大の先生とつながりがある方で、日本福祉大学を勧めてくれました。その先生は自分にとって、教員のモデルとしたい存在でした。そして実際、入学前、家族と美浜キャンパスを見学に行きました。そこで先輩が手話でのびのび話す姿に、障害の垣根が全く感じられず、感動したのを覚えています。ここなら力になってくれそうな先輩がいる、私も親もそう確信し、推薦入学で入りました。



## 共に学び、共に生きる。

- どんな大学生活を送ってこられましたか？

実際は明るく、頼りになる大学だと思いましたが、自分の力で生活を切り開くのは、とても大変でした。障害があると、どうしても人の手を借りることが出てくるけど、それを人にうまく伝えられずにいました。すると、先輩に「自分のしてほしいことは、もっと口に出して言わないとダメだよ」と言われ、それから、自分から主体的に行動し、気持ちを表現してやっていくことを学びました。また寮生活では、集団生活の中で、個人の生活を大事にしつつ、周りの生活も尊重し合うことを通し、生活をつくることを生で体験しました。寮では、障害学生受け入れの責任ある役にも就き、障害のある人を含め、人々が快適に生活できる条件を考えるという、福祉の原点を学ばせてもらったように思います。

## 生命の大切さ。

- 大学生活で、印象に残っていることは？

大きな出来事は、1985年1月28日、長野県のスキーバス転落事故。亡くなった22名は同級生で、うち5名が寮生でした。突然、仲間を失ったショックと混乱は、今でも鮮明に覚えています。それから、友達の志に自分の志を重ねて生きることを誓いました。もう一つが、在学中に病気で父親を亡くしたことです。経済的に大学生活を続けられるかという危機を経験し、命や生活について深く考えさせられました。私の日本福祉大学での大学生活は、そのような人生を学ばせてくれる出来事の積み重ねでした。

## 励ましあい、支えあう 教育の原点。

- 教員を目指したきっかけは？



最初から、大学の教員になりたいと思っていたわけではなく、障害の子どもの隣にいる先生になりたいと思っていました。大学の教員は声をかけられたことがきっかけでした。でも例え相手が違って、教育の原点は同じだと思うんです。その人に力をつけるお手伝い、それに役立つ活動を、励ましたり、支えたりしながら、意図的にすることが教育だと思っています。

## 生活保障は 教育を受ける権利を保障する

- 先生の研究分野について教えてください。

大学・大学院では、「教育のために障害のある子どもの生活条件をどうつっていか」という視点で、研究してきました。障害者福祉を本格的にやるようになったのは、実は社会人になってからなんです。なので私の障害者福祉は、教育と福祉からのアプローチをとっているかな。大学では、障害学生の実習教育支援を担当し、多くの学生と関わってきました。



## 自己を表現すること。

- 教員として福祉大の学生と関わって、印象に残っている事は？
- また、日々感じる悩みや課題はありますか？

自分のやりたいことをもっとしっかりもってほしい。私が昔、先輩から言われたように、一般の学生も、思いを口に出して自分を表現したほうが、よいんじゃないかな。その点で、最近は少し意欲が弱くなった学生が多いように感じます。それと、狭い福祉の枠組みに閉じこもらないで、もっとグローバルな姿勢をもってほしい。年々、国家試験の影響もあってか、福祉を狭くとらえる傾向が強くなってきたことは、気になります。福祉とは別の分野に就職することに、悩みをもつ学生が多くいるけど、学んだことの生かし方は必ずあるはず。広い視野をもって、羽ばたけることを望みます。

## それぞれの社会参加の方法を。

- 田中先生の今後の展望は？

教員としての仕事は、ひとまず区切りをつけることになるけど、決して社会福祉の研究を辞めるわけではありません。今後も社会に自分の考えを発信していく活動を続けていくつもりです。ただ、今の時点では、具体的にどういう形をとるか分からないけれど、自分らしい社会参加の仕方が必ずあると思っています。それを探って、無理なく、形にしていきたい。同じように、他の障害を持つ人も、仕事の有無を超えて、その人らしい社会参加のかたちがあると確信しています。例えば、一歩外へ出ることも、学校へ行くことも。そういうプロセスを手伝える、地域に根ざしたチャレンジドであってほしい。

## あたたかい目で見守ってね。

- ちゃれっ子通信の読者へのメッセージをどうぞ。

チャレンジドは、まだよちよち歩きかもしれないけど、長い目で見守って、育ててほしい。そのことを切にお願いします。



# めい・あい・へるぷ・ゆう

ダスキン・アジア障害者リーダー  
ドー・トゥイ・ハさん  
ホームステイ・レポート

## 日本の文化を感じよう！ツアー



◎ダスキン・アジア障害者リーダー第7期研修生のドー・トゥイ・ハさん（ベトナム出身・視覚障害）が、2005年12月28日～2006年1月4日まで、事務局員の石川家にホームステイに来ました。その間の「日本の文化を感じよう」ステイの様子をご紹介します...

### 出会い

28日、ハさんと名古屋で対面。新しい出会いにワクワク。ヘルパーステーションNEOを訪問し、灯台うどんで、ミニ・ウェルカムディナーを楽しみました。



### 常滑やきもの散歩道&ウェルカムパーティー

29日、NEOのメンバーと、常滑やきもの散歩道を散策。小さなお店やアトリエが点在する、風情漂う街並みをみんなで歩きました。色々な形の焼き物、道に埋め込まれているドラム缶、小学生が彫ったオブジェなどなど、触って感じられるものがたくさんありました。夜は、辻家でウェルカムパーティー。みんなはりきって、生カキ、なべ、ジンギスカンなど、ごちそうを囲んで、歓談しました。ハさんは、「日本の食べ物は、何でもおいしい！」とのことでした。



### 餅つき体験

30日、岐阜のお寺で、餅つき体験をしました。実際に、杵を持たせてもらい、ペタン・ペタンとつきました。そして、出来立てほやほやのお餅をいただきました。"Very good!!"と、初めての体験と伝統の味に、ハさんも大感激。夕日が沈み始める頃、なばなの里へ向かいました。イルミネーションは分からないけれど、木から、神秘的な音が流れていて、なかなかロマンチックな雰囲気を楽しみました。

### 年越し

31日、いつも平凡な年末年始を過ごす石川家なので、段とさほど変わらない夜ですが、年越しそばを食べて、NHKの紅白歌合戦を見ました。「この曲好きです」と、ハさんが好きなのは、「涙そうそう」日本語の先生がCDを聞かせてくれて、研修生はみんな好きだとか。日付が変わって、Happy New Year!! ベトナムより2時間早く、2006年に入りました。



## お節料理&初詣



1日、元旦の朝はゆっくり、おせち料理を食べました。おちよこでお酒を乾杯！八さんは、お酒は飲めないけれど、乾杯の雰囲気は、なかなかよいもの。お昼からは、熱田神宮&大須観音へ初詣。予想通りすごい人！でしたが、おみくじも引き、「中吉」と、まずまずのスタートをきりました。

3日、初売り福袋体験 初売りと言えば、「福袋」。試しに、30個以上入って1000円のアクセサリーの福袋を買ってみました。どんなものが入っているのやら・・・と開けてみると、店員さんが言った通り、「しょうもない物」が続々と。傑作は、羽の付いたピアスで、しかも色も形も「赤い羽共同募金」のよう。「変なもの！子どもみたい！」と、手にとっては、付ける真似をし、笑いました。たった1000円で、1時間以上、笑えたとは！

## お見送り

4日、長いようであっという間だった石川家でのステイも今日で終わり。八さんは、ステキな思い出をいっぱい作り、次の研修に向け、東京へ旅立ちました。あたたかく迎えていただいた皆さん、本当にありがとうございました！これから7月3日まで、東京・大阪などで研修をしていく予定だそうです。応援よろしくをお願いします！

## 八さんを通して感じた

### 日本・ベトナム・障害者事情あれこれ

- その① 日本に来て一番びっくりしたことは、「点字ブロック」だそうです。ベトナムでは見たことがなく、あまり視覚障害者で単独歩行をする人も少ないそう。
- その② 大学生活は、弟にバイクで送ってもらい通学。友達にテキストなどを朗読してもらい、勉強している。学費は年間2万円（政府の支援で、障害者は半額）
- その③ ベトナムは、兄弟は2人まで。人口の増加は貧困につながるため、政府が規制している。戦争で負傷した障害者への年金はあるが、病気や事故で障害になった人 には保障はない。
- 最後に④ ベトナムの朝ごはんの定番は、「フォー」。仕事や学校の前に屋台で食べる。昼食も屋台で。そして1時間のお昼寝休憩があるとか。最近、日本でも人気のベトナム料理、機会があったら、ぜひトライしてみてください☆

## プロフィール

ドー・トゥイ・八さんは、ベトナム・ハノイ出身の24歳。全盲で、2005年の9月より、日本で研修しています。ベトナムでは、大学で経済学と英語を学び、視覚障害者の団体で活動しているそうです。日本では、コンピューターの活用、視覚障害者の情報提供システム、プロジェクト・マネジメント、自立生活について学んでいくそうです。

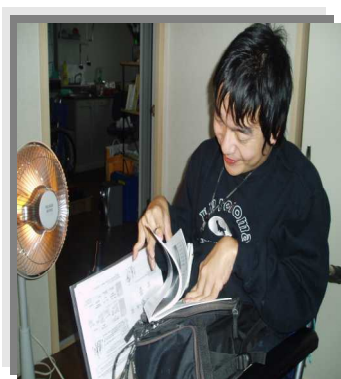


# 宮崎健が語る。 自立生活への想い。

## ◎自己紹介◎

宮崎健 (みやざきけん)

高知県出身、23歳。2005年春、日本福祉大学経済学部卒業。脳性まひの障害で、電動車イスで生活している。大学時代のお気に入り、「1332 東海ラジオ～聞いてみやーち」ふるさとの名産は、「カツオ」



日福大の卒業生、宮崎健さんが、1月20日(金)～23日(月)の3泊4日間、チャレンジドに研修に来られました。

宮崎さんは、高知県出身の23歳。昨年の春、日本福祉大学を卒業し、一時期半田で過酷な一人暮らしを経験され、その後、施設入所となりましたが、自立生活をしたいとの希望で模索していたところ、地元・高地の自立生活センター「HANDS 高知」藤田さんと出会いました。それをきっかけに、晴れて4月から、HANDS 高知のピアカウンセラーとして就職されることが決定。一人暮らしも始める予定だそうです。そのため、各地のCILで研修し、経験をつんでいくとのこと。

今回チャレンジドでは、障害学生・当事者へのインタビューを行い、事業の運営や行政との関わり、障害者福祉の動向などについて学んでいかれました。

宮崎さんにとっても、第2のふるさと?である美浜で、改めて自立生活について深める機会となったようです。その様子と研修を終えての宮崎さんのコメントを紹介します。

## 田舎のCIL 研修プレビュー

4月から、HANDS 高知のピアカウンセラーとなるべく、修行中の宮崎君。1月20日～23日までチャレンジドに研修に来て頂きました。主に美浜町に住む障害者・障害学生と対談に研修を構成し、旧友・先輩を含め様々な人に会って頂きました。長年美浜町に住む障害者と障害学生とでは視点が違い、共感できる部分や新しく気がつく事が見受けられたのではないのでしょうか。また、卒業してから障害学生の話聞き、宮崎君も昔を振り返りながら様々な事が見えてきたように思います。

その他は、美浜町や日本の障害者福祉の現状、チャレンジドの事業計画を共に考える会や障害学生のピア座談会INセントレアにも同行してもらい、内容の濃い研修になったのではないかと思います。

そしてチャレンジド恒例、夜の懇親会では、宮崎君が障害学生の自立生活について熱く熱く語り、理事長、事務局員一同宮崎君の成長ぶりに、誰もが驚きを隠せなかったのではないのでしょうか。最終日は仕事の都合上、事務局員全員で見送る事はできませんでしたが、電車の中からいつまでも、いつまでも笑顔で手を振る宮崎君を見て、今回は事務局員の方が宮崎君に教わる研修になったのではと、心地よい気分になりました。

## これまでの「私」を語る。

- 日福大に来る前は、どんな生活をしていましたか？

小学校から高校まで、養護学校の寮にいて、だいたい施設と同じような生活でした。朝8時に起き、授業の支度、9時くらいに通学、授業を受けて、3時ごろ学校から寮に帰り、7時から8時に寝る毎日。学校帰りに寄り道したり、遊びに行くことなんてなかった。下校の時間に帰らないと、バスに乗り遅れてしまうし、もし乗り遅れると10分くらい、一人で歩いて帰らないといけない。近くに遊ぶようなところもなく、土日でも寮にいて、ぼーっとしているか、テレビを見ていました。長期休暇は、家に帰っていたけど、親との関係が良くなく、僕の生活を良く言えば見守りたい、悪く言えば、拘束しようとする。だから、あまり外に出られなくて、寮と同じように、家の中で「ぼーっ」として過ごしていました。友達と出かけるのは、家から学校まで1時間くらい、友達が遠くに住んでいるから、遊べなかった

## 1人暮らしの第一歩。

- 日本福祉大学で学びたいと思ったきっかけは？

一人暮らしがしたかったから。家族が理解し応援してくれたというよりは、自分で受験を決めて、願書出す前日に、親に話し、事後報告でした。

## 仲間との関係性を学ぶ。

- 美浜での一人暮らしはどうでしたか？

やっぱり人間関係とかで、色々失敗したり、厳しい面はありました。友達とけんかして、そのまま別れてしまったり……。でも、それによって、人との付き合い方とか学べたと思うし、一人暮らしを経験できて、本当によかったと思っています。

## 学外生活のサポートを望んで。

大学生活を振り返って、こんなサポートがあったらよかったなとか、もっとこうなったらよいなと、今思うことがあったら、教えてください。

大学に、もう少し生活面もサポートしてくれる環境があれば、よかったと思う。生活がある程度安定してこそ、学業ができると思うけど、そうでないと、勉強どころではなくなってしまいます。ボランティアや友達の好意に、まかせきりじゃないかな。あとは、高校を卒業した後、大学の授業が始まる前に、ILP（自立生活プログラム）みたいなものが経験できたらよかったなと思います。一人暮らしがどんなものが経験して、先輩にも相談にのってもらえたら、もっとスムーズに大学生活を始められると思う。僕の場合は、入学前に相談にのってもらえるところや、先輩とのつながりも、ほとんどなかった。（藤垣さんとかは会っていたが）

## 大学と社会との狭間で。

- 学生と卒業してからの生活との違いは、どんなところでしたか？

日福がいかに特殊な環境で、実社会はもっと厳しいということ、痛いほど思い知った。日福では、みんながよく声かけてくれるし、何かあったら助けてもらえたけど、一般社会では、誰も声かけてくれないのが普通なんだなと。





## 自立生活への架け橋を渡る。

- HANDS 高知で就職することになった経緯を教えてください。

卒業後数ヶ月、何とか半田で一人暮らしをしていましたが、8月に、実家の高知に帰ることになり、ほぼ親の意向で施設入所（実際はショートステイ）になってしまった。

施設生活は、もちろん本意ではなかった。自立生活がしたくて、「どうしたらいいですかねえ？」と、チャレンジドに電話し、相談しました。そしたら、辻さんが「HANDS 高知」を紹介してくれ、早速、理事長の藤田さんとコンタクトをとってみました。

すると、その一週間後に藤田さんから、四国の「CIL ブロック研究会」というのがあるから、一緒に行かないか？と誘われ、早速に行かせてもらうことになったんです。それまでは、何をどこからはじめたらよいか、わからなかった。でも、こうして藤田さんとお会いことができ、いろんなところに連れて行ってもらう中で、障害をもっている人たちのいろんな考え方に触れて、いろんな生き方があるなあ、と思うようになっていきました。そして、自分の生活もだんだんイメージできるようになっていったように思います。

そんなところから始まって、何だかわからないうちに、「一人役員が抜けるから、HANDS 高地の活動を一緒にやらないか？」と言われ、「ぜひやってみたい」と希望し、仮採用が決まったんです。

## 古巣で学ぶ、障害者の地域生活。

- なぜ、チャレンジドで研修したの？ 後輩へのメッセージはありますか？

本音を言うと、藤田さんが研修先をどこかないかと探している時、「東海地方だったら、チャレンジドはどうか。きっと受け入れてくれるだろう」って僕が希望しました。まあ、もちろんそれだけではなく、大学時代から、チャレンジドの色々な企画を見ていたし、自分も関わらせてもらって、よかったなと思っていました。それに、辻さんに藤田さんにつなげてもらったおかげで、こうやって就職が決まり、研修できるようになった。そのお礼がてらに、訪問したいなと思ったんです。

大学時代は、障害を持つ人にじっくり話を聞くことがなかったけど、今回インタビューさせてもらい、深いところまで話が聞けてよかった。学生の頃とは違った角度から、改めて考えることもできたと思う。こんな僕でも、ここまで来れたんで、みんなならもっと上まで早く来れるんじゃないかな。どん底に落ちてても這い上げられるよ。だから、あきらめないで、がんばってほしいと思います。

## 夢に向かって！希望を胸に。

- どんなピアカウンセラーを目指したいですか？最後に一言！



やっぱりどんな時も、人の話をじっくり聞けるピアカウンセラーになりたいです。これを機会にチャレンジドとHANDS 高知がつながって、交流していけたらと思います。今回、研修でお世話になった方やインタビューに協力してくれた皆さん、ありがとうございました。また会える日を楽しみにしています。

特定非営利活動法人  
**HANDS 高知**  
**藤田代表に聞く！**

代表の藤田さんより、健くんとの出会いや研修に  
送り出すにあたっての思いなどを聞いてみました。

**HANDS高知について、簡単に教えて  
ください。**

地域で暮らす仲間を支えたいという思いで、4、5年前から活動しています。きっかけは、支援費の始まる前から行っていた、重度障害者の介護保障を考える会からでした。主な活動内容としては、ヘルパー派遣。それと、ピアカウンセリングという形ではありませんが、仲間の相談にのり、行事と一緒に行くなどして、2市町村に住む重度障害者の生活を支えています。今後は、もっと多くの町で、長時間介護の必要な障害をもつ仲間の自立生活をささえていけたらと思っています。

**健くんとは、どんな出会いだったの  
ですか？**

昨年の夏に、辻さんから電話があつて、健くんが自立生活をしたかったので、相談にのってほしいと言われたことがきっかけです。その後、本人から電話をもらい、直接何度か会いに行き、話をしました。彼の希望は、地域に出たい、働きたいということでした。そこで、「彼にどんな役割を担ってもらえるだろうか」と考えました。ちょうどHANDS高知では、カウンセリングをやる人がおらず、また頸椎損傷など重度の人が多いため、なかなか柔軟に動けないという状況がありました。そこで、健くんを体をつかってもらい、相談にのってもらえなかなと考えました。それと、健くんには、うまく自立して、地域で暮らす人のモデルになってほしいという期待もありました。そんな出会いがきっかけで、まずは、同じような仲間の相談にのるピアカウンセラーとして活動してみないかと声をかけたんです。

**研修に送り込むにあたって、藤田さん  
の思いを聞かせてください。**

とにかくたくさん経験をつんでほしいと思います。そして、他の団体の良いところを色々見習ってほしいと思っています。私たちも、それほど知識があつてやっているわけではないので、今後困った時に、相談にのってもらえたり、頼りにできるよう、受け入れ団体とのつながりをつくっていったらよいなと思っています。

**これから、健くんにどんなことを期待  
しますか？**

みんなに信頼される存在になってほしい。信頼されるのが、仕事はもちろんです。人間として何より大事だと思つから。まだまだこれからですが、彼ならできるとは思いません。と期待しています。

**また、逢う日まで・・・。**

今回、お忙しい中、インタビューに答えて頂きました、HANDS高知の藤田さん、宮崎健さん本当にありがとうございました。健くん！夢に向かって、大きく羽ばたいて下さいね。

